

「鉄ちゃん」の秘かな楽しみ

佐藤寛朗 (ドキュメンタリー雑誌『neoneo』編集委員)

「アジア千波万波」出品作の『エクス・プレス』(フィリピン/ジェット・ライコ監督)に“主演”として出てくる列車を見て、どこかで見覚えがあると思った方は勘がいい。

そう、窓こそ投石よけの金網で覆われているものの、青い車体に金色の帯のその車輦は、往年の日本の寝台特急「ブルートレイン」そのものだ。首都マニラと東部ナガを結ぶフィリピン国鉄の特急「ビコール・エクスプレス」は、2010年まで東京・金沢間を走っていた特急「北陸」の車輦が無償で譲渡され、2011年より使われている(現在は再び運休中と聞く)。鉄道マニアである私は、見覚えのある車内のパーツや、「スハネフ14」などと書かれた日本語表記が映るたびに、いちいち興奮してしまう。ここ15年ほどで、日本で使われていた中古の車輦が海を渡り、アジアで“第二の人生”を送るケースが増えた。フィリピンのほか、タイ、ミヤ

ンマー、インドネシアなどでも見られる。車輦の規格が近く、簡単な改造で走れるのが理由だ。数年前からアジア映画を観るたびにチェックしていたが、ついに山形映画祭で“再会”できたかと思うと感慨深くもある。

鉄道は、国家規模のインフラ・ストラクチャーである。車輦そのもの、車窓、駅舎建築、乗客層……といった、鉄路を取り巻く要素の一つひとつに、歴史や社会が反映されている。どこを結ぶ路線なのか。どこの国の援助で作られたのか。主人公はどこへ移動するのか。どんな乗客を乗せて走るのか。旧宗主国の影響や、その国の国際関係の現状まで窺える(例えば台湾の鉄道は、どの風景を切り取っても日本統治時代にその基礎があることが伝わってくる)。鉄路をめぐる映像が、ストーリーとは別の角度から、映画への理解を豊かにしてくれることもあるはずだ。

だから私は、画面に鉄道を見つめる

と、駅員の所作や乗客の荷物から、一瞬映る信号機や車窓の看板といった細かな所にも目を凝らす。そもそも鉄道は映画とよく似合う。「移動」にしる「密室」にしる、映画のストーリーを動かす描写に列車という装置はもってこいだし、同時期に誕生した「近代の産物」としての親和性もあるだろう(リュミエール兄弟がはじめに何を撮ったか!)。そういったことを抜きにしても、映画に映った列車には、鉄道マニアの心をくすぐってやまぬディテールに満ち溢れている。

監督本人も含めた様々な人物の記憶を集積させた映画『エクス・プレス』の中心には、人々を翻弄する国家的存在としての「鉄道」が見事に居座っている。虚実を織り交ぜた映像世界を行き来する『エクス・プレス』を観ると、流れゆく窓外の風景を列車から眺める私の心もまた、虚実の境を揺れ動いていることに気づく。そしてドキュメンタリー映画も、目前に広がる無数の事実をどう配置し、映像という仮象の連続にどう可視化するかという繊細な課題を抱えながら、今日も走り続けている。